



もっと知りたい

# 中川運河



中川運河  
ガイドブック



# 中川運河のみどころ

## ① 西宮神社・運河神社

中川運河の前身である笈瀬川(御伊勢川)のそばに西宮神社がありました。名古屋城築城の際には、石垣の材料となる石材を加工した場所であったとも伝えられており、境内には跡碑も建っています。現在は、運河の鎮守の神としてまつられています。また、港区には、昭和9年に造営された運河神社があり、地元では、西宮神社を「上の宮」、運河神社を「下の宮」と呼んでいます。地元の人たちの運河に対する思いを感じることができます。



西宮神社

## ② 名古屋港漕艇センター・中川口緑地

中川運河は、水上スポーツに必要な静穏性と延長、川幅を有しており、名古屋港漕艇センターを中心にボートレース大会などが開催されています。また、沿川には中川口緑地が整備されており、川面を眺めながら散策やジョギングを楽しむことができます。



中川口緑地



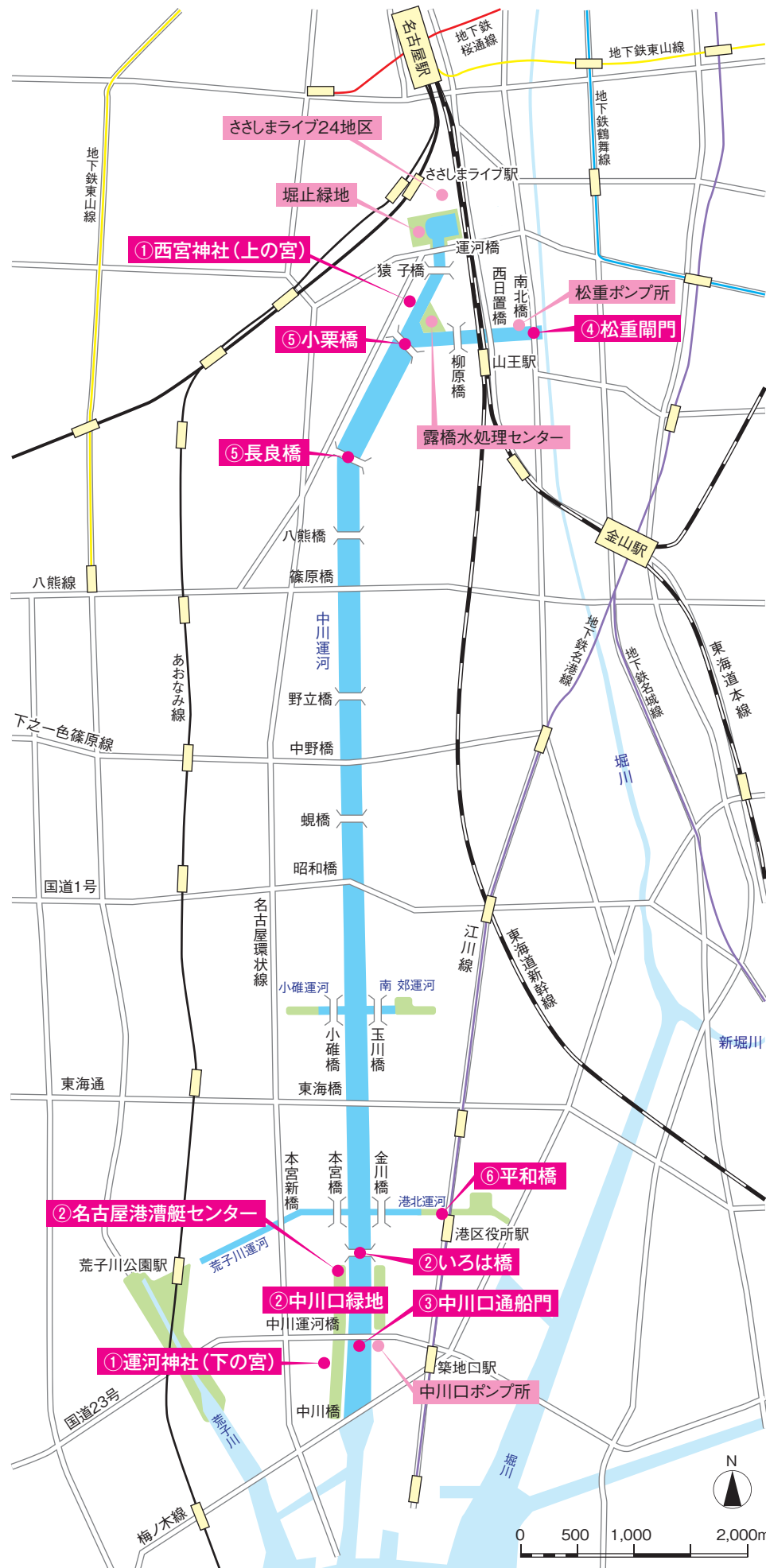
水上スポーツ(いろは橋から南を望む景観)  
NPO法人伊勢湾フォーラム フォトコンテスト  
「運河のレガッタ」(平山正雄氏)

## ③ 中川口通船門

中川口通船門は、水位差のある名古屋港と中川運河を船で通航できるよう、昭和5年に第一閘門が整備されました。最盛期には10時間以上の待合を強いられたことから、昭和38年に第二閘門が増設されました。その構造は、観音開きの水門を有するマイターゲート式となっています。利用の減少により平成3年に第一閘門が閉鎖されましたが、第二閘門は現在でも使用されており、水辺から通航の様子を眺めることもできます。  
※通船門のしくみについては、4ページをご参照ください。



中川口通船門



## ④ 松重閘門

松重閘門は、水位差のある堀川と中川運河を船で通航できるよう整備された施設で、昭和7年に開通しました。その構造は、水門が上下に動くストーンリー式で、水門の開閉のための釣合いおもりを収容する2基1組の塔は、異国情緒漂う雰囲気を醸し出しています。陸上輸送の発達により利用が減少したため、昭和43年に閉鎖されましたが、市民の強い要望により保存が決定し、昭和61年には名古屋市指定有形文化財、平成5年には名古屋市都市景観重要工作物に指定されました。現在は公園として利用されるとともに、塔屋は夜間毎日ライトアップされ、日中とは趣の異なる美しい姿を目にすることができます。



松重閘門のライトアップ

## ⑤ 運河らしい景観

都心と名古屋港をつなぐ広大な水辺に、昭和の面影を残す倉庫群や自然に生長した樹木が共存し、運河独特の魅力的な景観が形づくられています。小栗康平監督が昭和56年に制作した映画「泥の河」は、昭和30年頃の風景が残る小栗橋周辺が撮影の舞台になりました。運河に架かる橋からの眺めは、都会の喧騒(けんそう)を忘れさせ、心落ち着かせてくれます。



小栗橋から南を望む景観  
NPO法人伊勢湾フォーラム フォトコンテスト  
「運河の雲」(柚原昇氏)



長良橋から北を望む景観

## ⑥ 平和橋



平和橋

昭和12年に港北運河沿いで、名古屋市人口100万人突破、名古屋港開港30周年などを記念し、さらなる産業発展、国際平和の進展を目的に、汎太平洋平和博覧会が開催されました。現地には唯一、平和橋(名古屋市認定地域建造物資産)が残っており、時代の流れに思いを巡らせることができます。

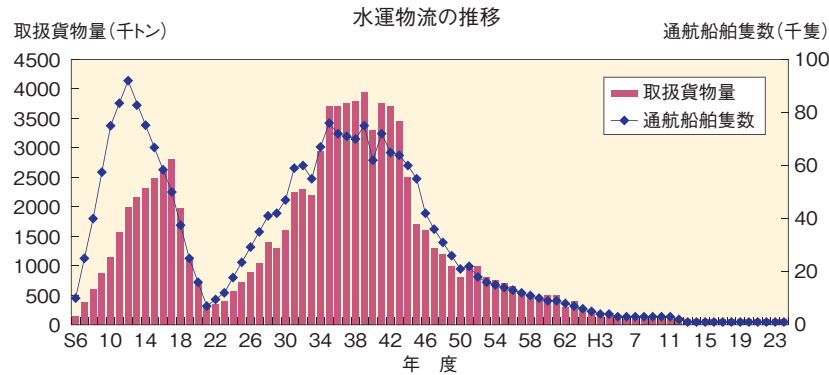


# 中川運河のあらまし

## 水運物流の推移

中川運河開通以来、取扱貨物量は年々増加しました。第二次世界大戦中は一時減少しましたが、戦後は、名古屋の経済発展とともに増加を続け、昭和39年にピーク（取扱貨物量約400万トン）を迎えました。運河では舢舨と呼ばれる小舟が多く利用され、これらは、家族の生活の場ともなり、係留場所であった中川口通船門の南の中川口はしけだまりは、「水面町」と称されました。

しかし、貨物の輸送形態が陸送へと変化したことなどから運河の利用が徐々に減少し、昭和41年に水面町は解散しました。現在では、1日数隻の小型タンカー船が往来することとなり、平成25年度の取扱貨物量は約5.3万トンと、最盛期の1.4%になっています。

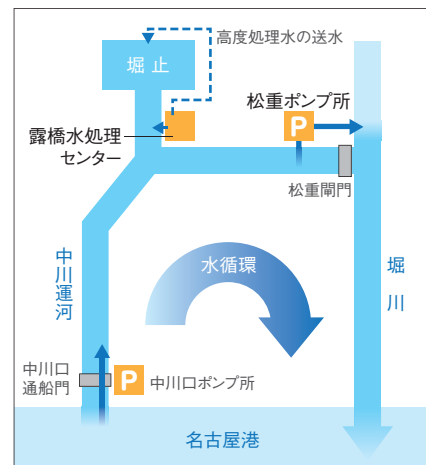


水面町の様子

## 水質改善

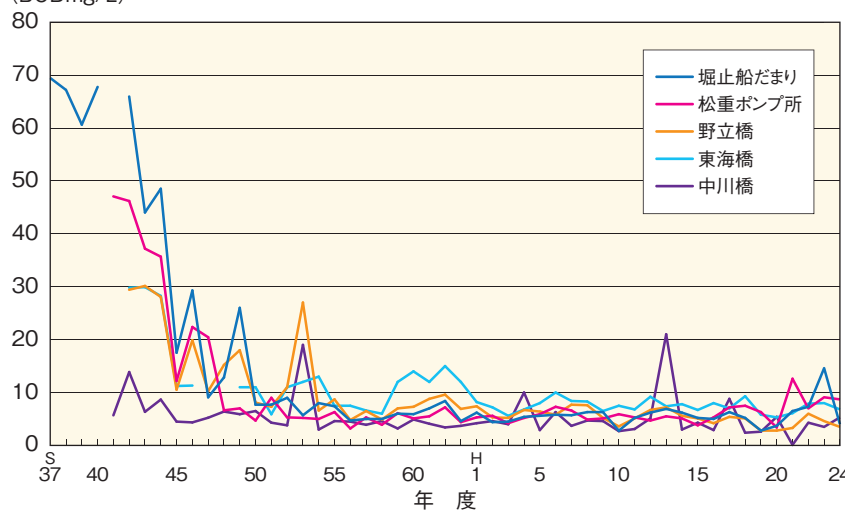
建設当時は、干潮時に中川運河の水を名古屋港に自然排水するのみであったため、十分な水循環が行えず水質が悪化していました。そこで、中川口から海水を取り入れ、松重ポンプ所（昭和12年供用開始）から運河の水を堀川へ放流する水循環を行い、水質改善に努めました。その後、高度経済成長に伴う人口増加、産業の発展により運河の水質は再び悪化しましたが、昭和46年の水質汚濁防止法の施行に基づく対策により水質は再び改善しました。現在は、水質の環境基準（E類型：東海橋BOD10mg/l以下）を概ね達成しています。

今後は、露橋水処理センターの改築による高度処理の導入やその処理水の一部を堀止船だまりに送水する取り組みを行うとともに、松重ポンプ所の改修による水循環の促進や底層・底質の改善などの施策を、多様な主体・関係者との連携によって検討・実施することにより、さらなる水質の改善に努めます。



水循環

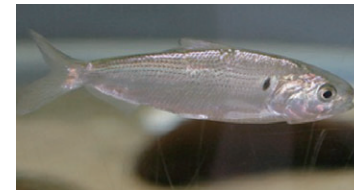
中川運河におけるBOD(生物化学的酸素要求量)の推移



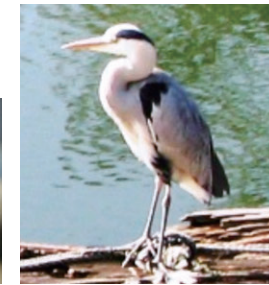
環境学習の様子

## 運河に生息する生き物

中川運河では多くの生き物が生息しており、ボラやコノシロなどの魚が泳ぐ姿や、アオサギ、ユリカモメ、カワウなどの鳥が飛来する様子を見ることが出来ます。また、エビやカニ、岸壁に付着する貝やフジツボなども目にすることができます。



コノシロ



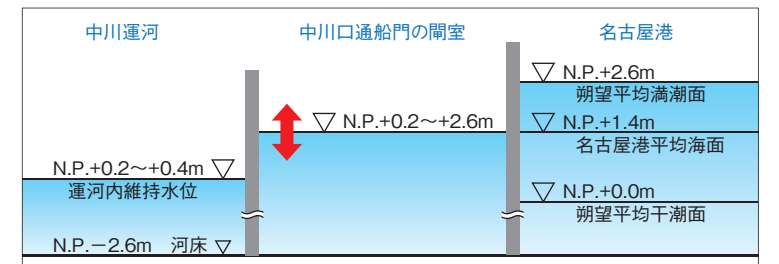
アオサギ



NPO法人伊勢湾フォーラム フォトコンテスト「ユリカモメ乱舞」(山田俊道氏)

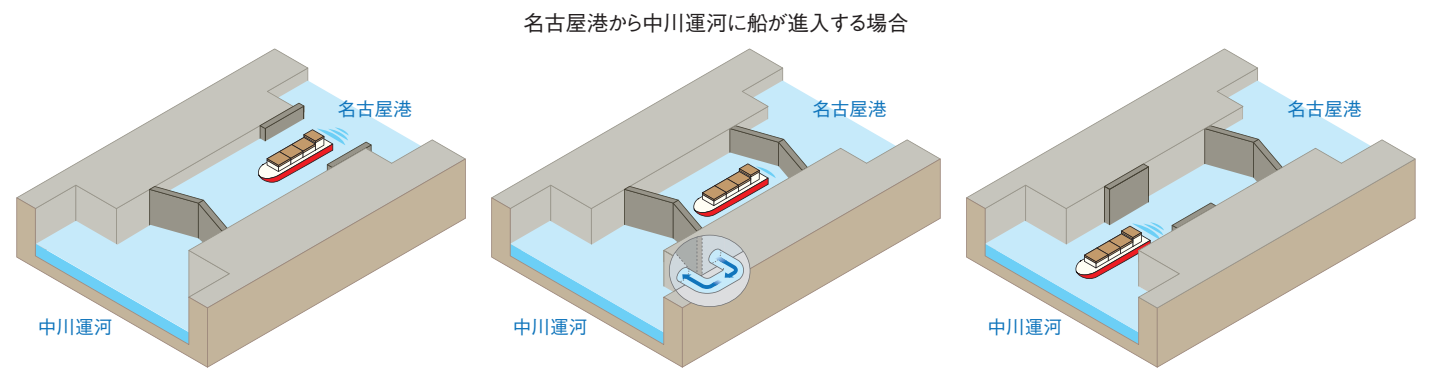
## 通船門の水位調節のしくみ

名古屋港は潮の干満により水位が変化(N.P.+0.0m~+2.6m)しますが、中川運河の水位は一定(N.P.+0.2m~+0.4m)に保たれており、通常、運河の水位は名古屋港より低くなっています。通船門は、水門で仕切られた閘室内の水位を上下に調整することにより、船の通航を可能にしています。これは、パナマ運河と同じしくみで、日本の運河に現存する数少ない施設となっています。



中川運河と名古屋港の水位の関係

※N.P.とは、名古屋港基準面の略。東京湾平均海面(T.P.)より1.412m低い高さ。



- ①通常は、名古屋港と運河両方の水門が閉じられており、閘室内の水位は運河と同じ高さになっています。船の通航の際には、海水を注水して閘室内の水位を名古屋港と同じになるまで上げた後、名古屋港側の水門を開け、閘室内に船を進入させます。
- ②名古屋港側の水門を閉じて、閘室内の水を運河に注水し、運河の水位と同じになるまで閘室内の水位を下げます。
- ③運河側の水門を開けて、船を運河に進入させます。その後、水門を閉じます。

## 防災機能

大雨、台風時に大量の雨水等が中川運河に流れ込んだ場合、中川口ポンプ所のポンプにより運河の水を名古屋港へ排水して水位維持を図ることにより、名古屋のまちを水害から守っています。

また、中川口通船門は、台風による高潮を防ぐ機能を有し、大規模地震に対する必要な対策も行っています。



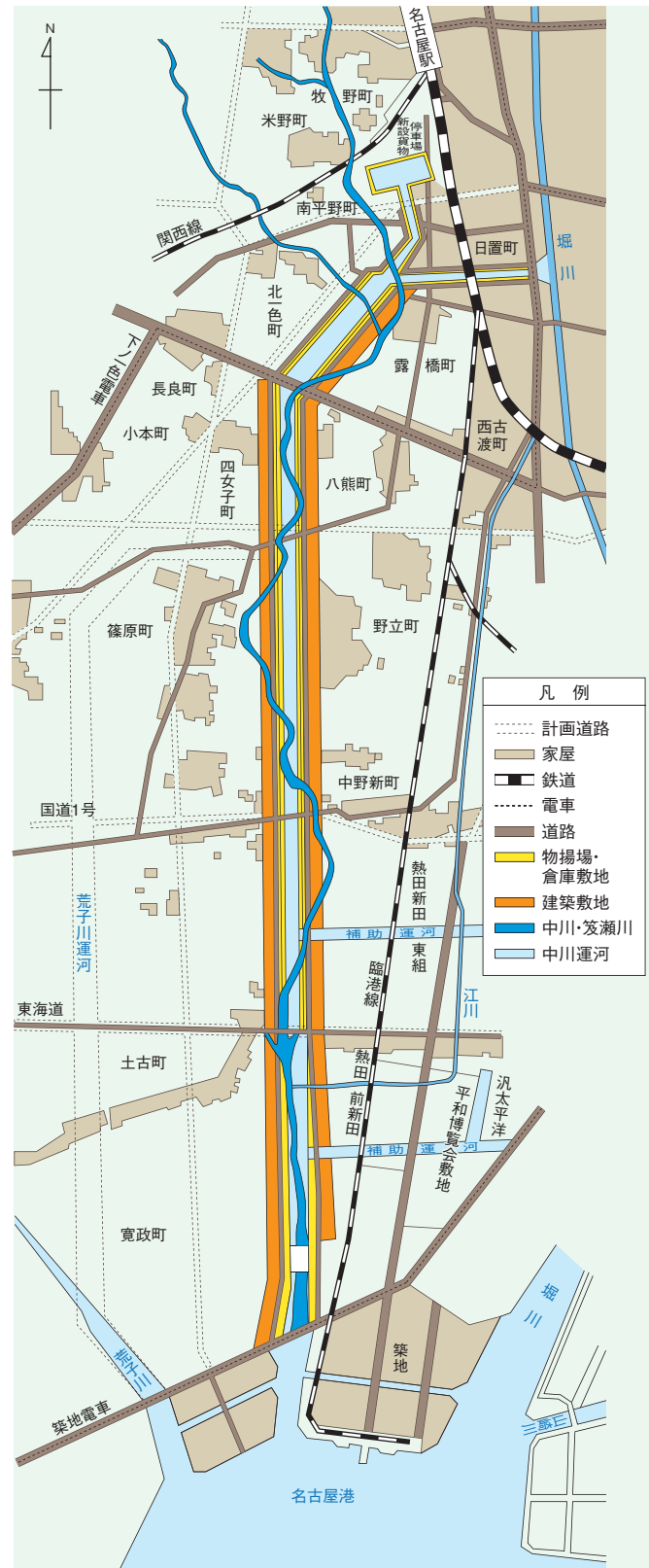
名古屋のまちを守る防災機能



# 中川運河の歴史

## 中川と笈瀬川

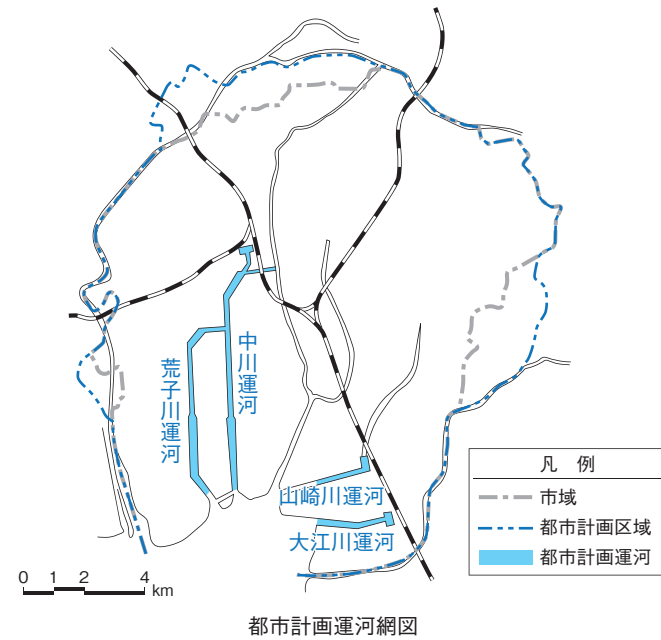
中川運河の前身は、現在の野立橋付近より上流は笈瀬川<sup>おいせがわ</sup>、下流は中川という自然河川でした。現在の国道1号以南の地域は干拓された新田地で、これら河川によって豊かな水に恵まれていましたが、土地が低かったため、大雨の際には大きな被害に見舞われていました。



中川運河略図(開削当時)

## 都市計画運河網

名古屋港は明治末期以降、目覚ましい発展を遂げましたが、名古屋港と市街地を結ぶ堀川、新堀川は物流運河としての規模が小さく、さらなる名古屋の発展を図るためには、必ずしも十分ではありませんでした。そこで、大正13年に、中川運河、荒子川運河、山崎川運河、大江川運河からなる都市計画運河網が決定されました。



都市計画運河網図

## 中川運河の開削と敷地造成事業

中川運河は大正15年10月に着工され、4年後の昭和5年10月(東支線を含む全線は昭和7年10月)に開通しました。

開削にあわせて、掘った土を利用して運河兩岸の敷地造成が行われ、物揚場や道路の整備、土地区画整理事業による工場等の誘致が行われました。当時の新聞では、「東洋一の大運河」と伝えられています。



完成間近の中川運河

# 中川運河の将来

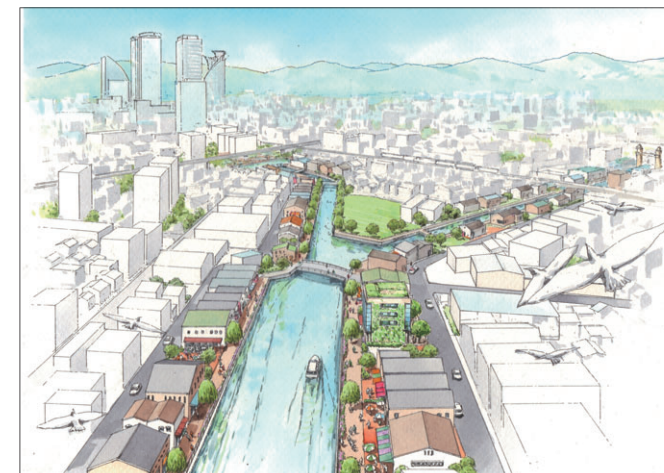
## 中川運河再生計画

平成24年10月に、うるおいや憩い、にぎわいをもたらす運河への再生をめざし、「中川運河再生計画」を策定しました。再生計画では、運河を3つのゾーンに分け、それぞれの再生イメージと取り組み内容を示すとともに、水上交通の活性化についても位置付けています。現在、さまざまな主体と連携しながら、再生に向けた取り組みを進めています。

※再生計画をはじめ運河に関する取り組みについては、名古屋市及び名古屋港管理組合の公式ウェブサイトをご覧ください。



ゾーニング図



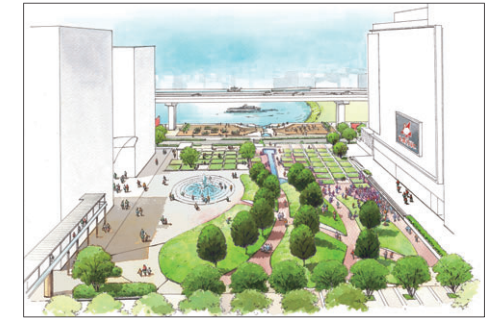
にぎわいゾーンの再生イメージ



水上交通の活性化

## ささしまライブ24地区・堀止緑地

ささしまライブ24地区の前身である旧国鉄笹島貨物駅は、その南に位置する中川運河とともに物流の一大拠点として機能していました。貨物駅が昭和61年に廃止された後は、都心部に残された希少な大規模遊休地となっていました。現在、国際歓迎・交流の拠点をめざしたまちづくりが進められています。また、堀止船だまりでは、水辺空間を活用した親水緑地の整備が行われています。



ささしまライブ24地区内公園の整備イメージ

## 市民活動の展開

中川運河は、水上スポーツの場として活用されるとともに、運河を通じた学校教育や生涯学習も行われ、近年は、中川運河の水辺や倉庫を活用した文化・芸術活動も盛んに開催されています。平成25年度からは、運河を舞台とする現代アート<sup>アート・テクノロジー</sup>を継続的に支援するための助成事業(ARTtoC10)も展開されています。



課外授業の様子



中川運河を舞台とする現代アート



# 中川運河の年表・諸元

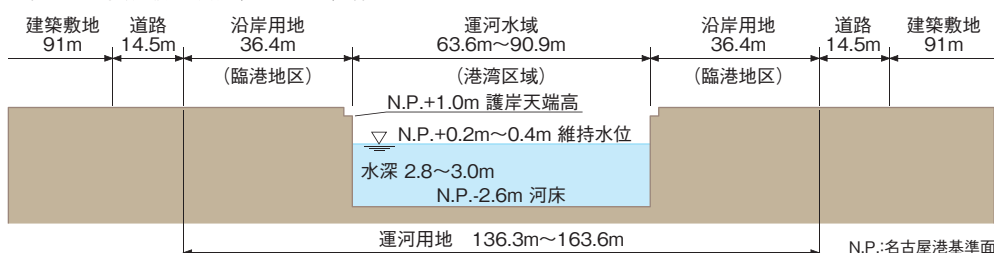
## 年表

1924年(大正13年)	都市計画運河網の決定、事業認可
1926年(大正15年)	中川運河の工事着手
1930年(昭和5年)	幹線及び北支線、中川口第一閘門の供用開始
1932年(昭和7年)	東支線、松重閘門の供用開始(全線開通)、第1回中川運河まつり開催
1933年(昭和8年)	露橋下水処理場完成
1937年(昭和12年)	松重ポンプ所の供用開始、名古屋汎太平洋平和博覧会開催
1952年(昭和27年)	中川口ポンプ所の供用開始
1963年(昭和38年)	中川口第二閘門の供用開始
1964年(昭和39年)	舟運のピーク
1968年(昭和43年)	松重閘門の閉鎖
1976年(昭和51年)	松重閘門の使用廃止
1977年(昭和52年)	松重閘門の保存を決定
1982年(昭和57年)	南郊運河東部埋め立て、南郊公園完成
1984年(昭和59年)	荒子川公園完成
1986年(昭和61年)	松重閘門公園完成、港北運河東部埋め立て、港北公園完成
1993年(平成5年)	基本計画策定、名古屋港漕艇センター開設
1996年(平成8年)	中川口西遊歩道完成
1997年(平成9年)	小栗橋橋詰緑地完成
1998年(平成10年)	小碓緑道完成、昭和橋橋詰緑地完成
2008年(平成20年)	中川口緑地完成
2010年(平成22年)	堀止緑地工事着手
2012年(平成24年)	中川運河再生計画策定

## 諸元

運河形式	閘門式・開削運河						
	中川運河			横堀			
延長	幹線	北支線	東支線	小碓運河	南郊運河	荒子川運河	港北運河
		6.4km	0.7km	1.1km	0.1km	0.2km	1.3km
	8.2km			2.1km			
幅員	64~91m	36m	36m	10.3km			
	56ha*			45m	49m	45m	45m
水域面積				9ha			
				65ha			
沿岸用地の幅員	36m	9m		(私有地)			
沿岸用地面積	43ha						

※中川運河の水域面積には、堀止(91m×273m)を含む



企画・発行：名古屋市住宅都市局・名古屋港管理組合

名古屋市公式ウェブサイト <http://www.city.nagoya.jp/>

名古屋港管理組合公式ウェブサイト <http://www.port-of-nagoya.jp/>